

菊池佐野地区（菊池市）

農を楽しむ （作業効率化・品質向上・6次産業化）

キーワード

法人経営

くり園の再生

果樹



ビジョン策定年度：平成30年度 目標年度：令和5年度

1. 課題と将来像・ビジョンの内容

地区の「課題」と「将来像」

【地区の課題】

- ・農家の高齢化
- ・農業後継者の不足
- ・小規模農家が多く、機械などへの個別投資が難しい
- ・数十年前に整備されたくり園の古木化・廃園化
- ・5戸ある畜産農家も小規模経営であり、WCSや牧草収穫は委託に頼っている



【地区の目指す姿】 = **ビジョン**

高齢者の営農意欲を持続し、次世代のリーダー育成や農産物の収益・品質向上につながる地域づくり

- (1) 作業の効率化と法人経営
- (2) 農産物の増収と品質の向上
- (3) 農産物の6次産業化を目指す



ビジョンの内容

(1) 作業の効率化と法人経営

- ① 高齢者の農業知識と営農意欲を活かして、軽労働の作業で法人経営に参加する。
- ② 農地集積や機械導入によるコスト低減と労力軽減。
- ③ オペレーターを雇用する。
- ④ WCS・牧草の高性能収穫機械の確保。
- ⑤ ミニショベルと果樹園管理機械を導入。

(2) 農産物の増収と品質の向上

- ① くり園を整地し、改植・新植により増収増益を図る。
- ② 営農指導ができるのリーダーを育成し、農産物の増収と品質向上を図る。
- ③ 有機堆肥により地力を高め、高品質の農作物を作り出す。

(3) 農産物の6次産業化を目指す

- ① たけのこ・しいたけ・くり等の二次加工により付加価値を高め、6次産業化を目指す。
- ② 中心となる女性組織の強化を図る。

整備・導入内容

令和元年度	ロールベラー、ラッピングマシン、モア、バックホー、トレーラー、畦草刈機
令和2年度	農機具倉庫新築工事、乗用ロータリーモア、ウイングモア
令和3年度	ウッドチップパー、耕運ロータリー、作業施設、水選別機能付き選果機

【成果目標】

- ・法人のくり園面積を8haまで増加する。
- ・飼料作物の作付面積を17ha確保する。
- ・ごぼうの作付面積を2ha確保する。



2. 菊池佐野地区の現状

【農業者に関する状況】

- ・総戸数 21戸
- ・総人口 61人
- ・農家戸数 20戸（うち1戸は地区外より）
- ・農業者数 35人
- ・担い手数 3人
- ・65歳以上の就農者数 20人

【農地に関する状況】

（1）面積区分

- ・水田 46.7ha（うち法人16.4ha）
- ・畑（樹園地） 30.6ha（うち法人9.6ha）

（2）筆数

- ・水田 350筆（うち法人97筆）
- ・畑（樹園地） 253筆（うち法人70筆）

（3）作付区分

- ・水田 WCS・水稻・ごぼう
- ・畑（樹園地） くり

（4）耕作放棄地

なし

【基盤整備に関する状況】

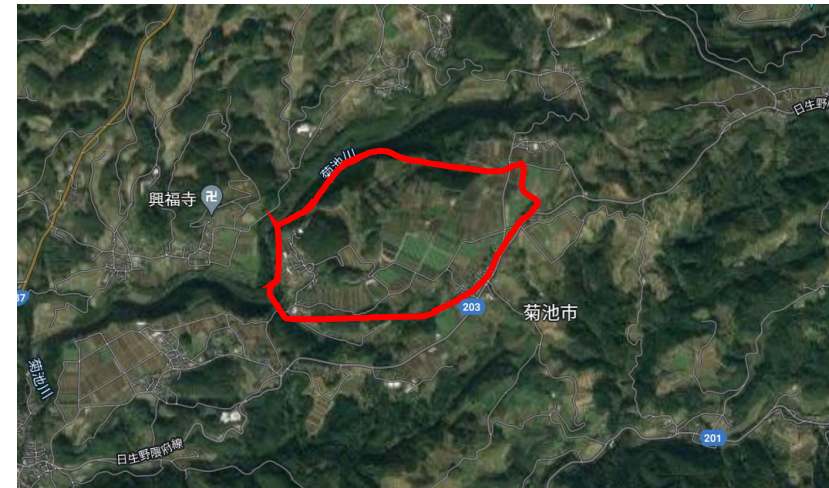
- （1）耕作道路 幅員が2.0m以上・舗装済
- （2）排水 コンクリート水路
- （3）用水 水路から直接取水

■ 地区の現状

- ・地区の農業従事者は**65歳以上が約60%**を占めている。
- ・中山間地で水田が平場に比べ狭く畦畔の傾斜度も大きいため、**農地の維持管理に労力が必要。**
- ・小規模農家が多く、機械導入の**個別投資はコストが高く難しい。**
- ・農業従事者の高齢化・兼業化によって数十年前に整備された**栗園の古木化・廃園化が進んでいる。**
- ・平成30年11月に**農事組合法人菊池佐野**を設立。



農地集積加速化事業 平成27年度指定地区



(1) ビジョン策定に至ったきっかけ

基盤整備が進み、資金確保のため法人化を模索

他の中山間地同様に高齢化等による厳しい状況が続いているが、農家の営農意欲は高い地域である。平成24年～26年に基盤整備が進み、効率性の高い大型農業機械の必要性が生じた。しかし小規模農家が多いため、各戸での設備投資は難しい。そこで法人化を視野に入れながら、**平成28年「佐野の農業を考える会」**を立ち上げた。

法人の役割への理解がなかなか浸透せず、どんな営農体制が佐野にとって良いのか提案・話し合いを約3年間繰り返し、**平成30年11月に「農事組合法人菊池佐野」**を設立。同時期に本事業のビジョン策定に至った。



平成30年11月に設立した「農事組合法人菊池佐野」

(2) ビジョン策定メンバーと手法

【メンバー】

「農事組合法人菊池佐野」を中心とした、繁殖牛、くり、水稻、ごぼう、飼料作物などを手がける農家20人。

【手法】

行政・JA及び（公財）熊本県農業公社の協力のもと、話し合いを重ねて合意形成を図った。

(3) ビジョン策定の流れ

明確な目的

当初より、農業従事者がいかに営農意欲を持ち農業を続けられるかという課題の解決策として、本事業を活用することで①軽作業化・効率化を図り農家の負担軽減②法人による地域内の古木化、廃園化したくり園の再生、くりの生産・加工を主軸に取り組みたいと考えていた。

具体策の検討

改めて地域の営農体制について協議し、必要な農業機械・施設の導入等を計画。

合意形成

もともと法人設立までに、法人の役割について「高齢農家の労働力不足を補う、収益を上げるための法人であって、土地や収入を奪うものではない」という認識をある程度浸透させていたこと、共同での農業機械導入等メリットが大きいこともあり、比較的スムーズに合意に至った。

■ ビジョン検討の流れ

回	実施日	話し合いの具体的内容	参加人数
1	平成30.5.28	・ 地区農業ビジョンの検討	6人
2	平成30.6.1	・ 地区農業ビジョン及び事業内容の検討	13人
3	平成30.6.24	・ 地区農業ビジョン及び事業内容の検討	7人
4	平成30.7.8	・ 地区農家全体会議を開催	18人
5	平成30.8.28	・ ビジョンの作成 ・ 畦畔の草刈り機械の検討	9人
6	平成30.11.12	・ 樹園地、農地の畦畔状況等の 行政職員視察	15人
7	平成31.1.9	・ 申請資料の作成及び県との検討会 予定日設定	7人

(4) 重点ポイント①

法人経営で補い合う農業

高齢の農業従事者の「営農の生きがい」を活かすには、個々の負担を減らすことが必要。本事業を活用し、機械を導入することや**法人による農地・樹園地の管理、作業受託**を可能にすることは、労働力不足の高齢農家にとって大きなメリットとなる。



ビジョン検討会議の様子

(5) 重点ポイント②

くり園の再生で産地化を目指す

法人設立時より、地域内で受け継がれてきた**くり園を法人に集積し、地区全体でくりの販売・加工を進めて増益を図りたい**と考えていたことから、主軸の作物として取り組むことになった。「くり」という柱が一つあることで、6次産業化も視野に入れた**地域の一体感が生まれる**。

ビジョン（1）作業の効率化と法人経営

①高年齢者の農業知識と営農意欲を活用し、軽労働の作業で法人経営に参加する。

法人に任せるところは任せ、高齢者のやりがいはそのままに

ビジョン策定時から法人への水田・くり園の農地貸付・農作業委託意向の把握を進めた。くり園は「農事組合法人菊池佐野」に集積し、その経営面積は当初の目標8haを上回り、10haまで拡大。くりの安定した生産基盤が整いつつある。栽培管理は法人メンバーによって実施。収穫作業や草刈り等の作業受託も法人で行っている。

高齢者の「農業を楽しむ」気持ちを活かせるよう、高齢者にできない作業・管理を法人が手伝うという考え方を基本としている。

くり園や農地の管理を法人に任せられるようになったため、水田ごぼう等の野菜栽培に力を入れられるようになった。

※機械導入による軽作業化については以下②～⑤を参照

※くり園の再生についてはP8のビジョン（2）-①を参照

②農地の集積や機械の導入によるコスト低減と労力の軽減。

共同で使う農業機械の導入効果が出た

バックホーの導入により、耕作放棄地の解消や新たなくり園の整備が可能となった。またロータリーモアやウイングモア等の導入により、除草作業の時間が大幅に削減。省力化して余力が生まれたことから、くり新植面積の拡大につながった。



農家が高齢で管理できなくなった樹園地や農地で、くりの新植・改植が進む



導入機械は令和2年度完成の農機具倉庫にて保管・管理



ビジョン（1）作業の効率化と法人経営

③オペレーターを雇用する。

雇用までには至っていない。将来的には若い後継者が必要と考えている。

④飼料稲・牧草の高性能収穫機械を確保。

飼料の生産スピードが向上

令和元年度にロールベラーやラッピングマシンを導入。**重労働である飼料収穫の作業時間が短縮され、飼料の生産スピードが上がった**。これを受けて、これまで実行できなかった飼養頭数の増頭が計画できるようになった。

飼料作物の作付面積の確保

佐野地区は現在耕作放棄地がなく、水田では裏作も盛ん。飼料作物の作付面積は拡大しており、目標面積までは至っていないが、現在WCSを6ha、イタリアンライグラス9haを確保。粗飼料の自給率アップを引き続き進めたい。

⑤ミニショベルと果樹園管理機械を導入。

バックホー、くり剪定枝処理用のウッドチップパー等を導入。くり園の再生が進んでいる。



くり剪定枝処理に用いるウッドチップパー

ビジョン（2）農産物の増収と品質の向上

①くり園を再度整地し、改植・新植により樹園地区として増収増益を図る。

法人でくり園の経営面積を10haまで拡大

「農事組合法人菊池佐野」により、**くり園の集積・整地が進み、経営面積は拡大している**。令和元年度に新植した60aのくり園は、令和4年度より収穫が始まる予定。面積10haのうち法人直営は130aで、残りは利用権設定。

くり園が拡大したことで出荷作業に時間がかかるようになった。そこで令和3年度中に、くりの剪定に用いるウッドチップパー、水選別機能付き選果機を導入。

選果機を導入することで、出荷するくりの品質が上がるのではないかと考えられる。選別作業員の確保といった運営方法は、検討の必要がある。

新たな問題としてイノシシによる被害が増加したため、対策を行う必要がある。



バックホー等を使って整地し、新植したくり園

②営農のリーダーを育成し、農産物の増収と品質の向上を図る。

Uターンによる新規就農者が4人

農業機械の確保や労力の省力化、機械導入コストの低減が進み、安定した生産基盤が整いつつある。結果、**Uターンによる新規就農者が増加している**。さらに高性能機械を導入し、オペレーターを育成して労力の軽減を図る。

・ごぼう2人（20代、50代）／くり・米1人（50代）／くり1人（60代）

③有機堆肥により地力を高め、高品質の農作物を作り出す。

高品質の農作物としては「**水田ごぼう**」の**プランティングに成功**している。堆肥舎を活用した有機堆肥の活用を目指しているが、**具体的な成果が上がるまでには至っていない**。

ビジョン（3）農産物の6次産業化を目指す

① たけのこ・しいたけ・くり等の二次加工により付加価値を高め、6次産業化を目指す。

ビジョン策定当初は様々な野菜の加工を考えていたが、当面はくりの皮むき加工・販売を考えている。また補助事業等の活用による、くり皮むき機の導入を検討している。**真空包装機等の加工設備が整いつつあるので、今後は農家側の知識や経験、技術不足をどのように補うかが課題。**専門家の支援も受けつつ、商品開発・販路開拓に取り組む。

② 女性の組織強化を図る。

地域の女性部は大学生ボランティアなどとの交流に際して、料理の提供などの活動しているが、**組織強化までには至っていない。**今後は飲食店と協働して、くり料理のメニュー化など進め、佐野の知名度向上を図りたい。

※ビジョン以外の特記事項～大学生との定期的な交流

地域のふれあいの機会が増えた

月に一回10人程度、熊本大学の学生をボランティアとして招き、圃場の草刈りや観賞用の花の種まき、収穫等の作業をお願いしている。地域の女性部による料理の提供等も実施。高齢者が多く、個々での年末の餅つきが困難なことから、令和3年12月には大学生と餅つきイベントを開催。餅の販売の他、豚汁やおしるこも用意し、交流を深めた。

労働力として助かるのはもちろんだが、大学生が定期的にやってくることで地域全体が活性化するため、力を借りながら催し等を実施する機会を持ちたい。



令和3年3月は花の種まきと猪鍋で交流



餅つきイベントの様子

振り返り・成果・今後に向けて

(1) 振り返り（ビジョン策定と取り組みの総括）

【取り組みが継続するためのポイント①
～ビジョン策定時】

**実現可能な方法を探り
農家の不安を取り除く**

【取り組みが継続するためのポイント②
～取り組みの総括】

**主軸作物をきっかけに
地域全体を盛り上げる**

(2) 成果

【成果目標】

- ・法人のくり園面積を8haまで増加する。
- ・飼料作物の作付面積を17ha確保する。
- ・裏作の水田ごぼう作付面積を2ha確保する。

【結果】

- ・くり⇒10ha *利用権設定し法人に集積。JAに出荷中。60aは法人として新植
- ・飼料作物⇒15ha (WCS6ha・イタリアンライグラス9ha)
- ・裏作の水田ごぼう⇒2ha

【メンバーの声】

和らいだ不安と地域のつながり

目に見えて個々の農家の負担軽減・軽作業化が進んだ。新植したくりの収穫はこれからだが、くり園の再生が進むことで希望が持てた。本事業とは別だが、大学生との農村交流も重なり、地域全体で何かに取り組むことで活気づくと感じた。

(3) 今後に向けて

くり園の充実とイノシシ対策

くり園の拡大を進め、くりの品質向上のために不良品種の淘汰や改植を推進。選果機やくりむき機の導入で、生ぐりを、むきくりに加工した。くり園拡大に伴って新たに懸念されているイノシシ被害については、行政とも協議して対策を考える。